



Number 26

June, 2022

ジョージ・エリオットとの縁

新会長 廣野由美子

ジョージ・エリオットと私との関係は、自身の内から出てきたものと、外からやってきたものとのタイミングによって、形成されてきた。こういう関係を、「ご縁」というのだろう。まず、出会いは、大学でドイツ文学を専攻し、卒業して間もないころ、大阪の書店で『ミドルマーチ I・II』（工藤・淀川共訳、講談社世界文学全集）を見かけ、買って読んだことだ。その後しばらくして、私は英文学に転向して大学院に入り、修士論文のテーマに『ミドルマーチ』を選んだ。もう 35 年ほど前のことだから、そのころ自分が何を考えていたのかはよく覚えていないが、英文学の研究者を目指すことと、エリオット研究とが、どうやら私のなかでは結びついていたらしい。

ここまでは「内から出てきたもの」だが、そのあと次第に「外からやってきたもの」に触発される機会に恵まれるようになった。日本ジョージ・エリオット協会の第 2 回全国大会のシンポジウム『「ミドルマーチ」を読む』で、司会者の荻野昌利先生から講師として登壇するようにとのお話をいただいた。あとお二方の講師、松本三枝子先生、大田美和先生とも会場で初めて出会った。本番のとき、最前列で会長の海老根宏先生が熱心に聴いてくださっていて、私にとっては、緊張すると同時に映えある体験だった。

その後しばらくして、彩流社の「時代のなかの作家たち」シリーズの企画で、監修者のブロンテ研究者、故白井義昭先生から、ティム・ドリン著の『ジョージ・エリオット』の翻訳を依頼された。自分の勉強にもなるよい機会だと思ってお引き受けしたものの、これは予想以上にたいへんな仕事だった。著者ドリン氏の英語が実に難解だったからだ。率直なところ、私は（英語・日本語を問わず）長い複雑な文章を書く人が苦手だ。ふつうなら、苦手な文章は、飛ばし読みするという自由もあるが、翻訳となると、一文たりとも無視できず、すべての文章に徹底的につき合わなければならない。全部自分の文章に置き換えるつもりで取り組んだので、四年間にも及ぶ難業となった。しかし、おかげで、該博な知識の持ち主であるドリン氏の書く内容がしっかり頭に入り、後々役立った。相性が合う場合だけではなく、相性が合わない場合（ただし、ここでは文章に限った話だが）にも人との縁が深いことはあるのだと、このことから学んだ。

ある年、大学院の授業で『ミドルマーチ』を取り上げて、このテキストを読み直したとき、物語の面白さに、大学院生たちも私自身も毎週わくわくした。院生たちの間では、「カソーボンのように論文が書けない」という焦りの表現も流行ったりした。一年間を終えたとき、書き込みがぎっしり詰まったテキストをもとに、何らかの形にまとめておきたいという気持ちになった。エリオットの文章は難解なので、まずは、それを勢いよく読める日本語にしてみたいという思いが浮かんできた。ドリン氏の本を翻訳するという経験を経ていなければ、とてもそんなことは思いつかなかっただろう。そこで、光文社古典新訳文庫の担当者に相談してみた。すると、担当者も学生時代に、ある著名な外国人教授の講義で、『ミドルマーチ』が偉大なイギリス小説と聞いたことを記憶しておられ、翻訳書を出したいと思っておられたとのことで、順調に話が進んだ。訳稿には、ずいぶん鉛筆の書き込みを入れられた。「いま、息をしている言葉で」というのが、この文庫のモットーだったが、私も驚くほどの徹底した「わかりやすさ」志向の方針だった。もちかけたのは私のほうからだったので、

これは正確に言うと、外から入ってきた話ではない。しかし、出版の経験のある人ならご存じだろうが、本というのは大いに「ご縁」が作用し、縁がなければ実るものではない。

二年前、全4巻の翻訳のうち、最終巻の訳業が終わりにさしかかったころ、中公新書の編集者から連絡があり、以前に上梓した『批評理論入門——「フランケンシュタイン」解剖講義』の姉妹編として、小説の読み方についての新書を書いてほしいという相談があった。私は、ちょうど『ミドルマーチ』を翻訳しながら、気になったことについてメモを取り、それをもとに各巻末に「読書ガイド」を書くという作業を続けていた。だから、『ミドルマーチ』についてかなり書きたいことがたまっていたので、この新書では、ぜひ『ミドルマーチ』を材料に使わせてもらいたいと提案した。編集者は、『フランケンシュタイン』とは違って、『ミドルマーチ』は一般に知られていない作品だということを気にしていたが、無事企画は通過した。『ミドルマーチ』を知らない人でも新書を読む気になり、新書を読んだ読者が、『ミドルマーチ』を読みたいという気になってくれたなら——そういう一念で、私は『小説読解入門——「ミドルマーチ」教養講義』を執筆した。

しかし、この願いはそうそう容易にかなうものではないのだと、新書が出版された後、いまとなって実感している。『フランケンシュタイン』と『ミドルマーチ』とでは、日本では、名称の知名度、人々の関心や反応がまったく異なる。『ミドルマーチ』の長さも、一般読者が敬遠する一因のようだ。この小説を読んでみさえすれば、エリオットがどんなに面白い、そして偉大な作家であるかがわかるのに、という思いは、なかなか一般読者には届かないようだ。何かのきっかけや仕掛けが必要なものかもしれない。これについては、いま小さな希望を抱いていることが、ひとつある。昨年、社会人がリベラルアーツを学ぶためのプログラム製作の企画が某社で立ち上がり、私の新書を読んだという担当者から、動画出演の依頼をいただいたことだ。題材は『ミドルマーチ』である。いま編集作業の仕上げ段階で、近々（7月中予定）発表されると聞いている。実りがあるかどうかは別として、エリオットとの縁は、これからも見逃さないように努力したいと考えている。

もちろん、何よりも大きな、外からやってきたご縁は、このたび日本ジョージ・エリオット協会の会長就任のお話をいただいたことだ。エリオット文学が日本で盛んになるように、微力ながらお役に立てればと願って、ご縁をかみしめている。

日本ジョージ・エリオット協会 第24回全国大会報告記

濱 奈々恵

2021年12月11日（土）、第24回日本ジョージ・エリオット協会全国大会が開催された。昨年度はコロナウィルス感染拡大防止の観点から全国大会が延期されたが、今年度はZoomでの開催となった。佐藤エリ氏の総合司会のもと、谷綾子氏から開会の辞が述べられ、研究発表が行われた。

最初に谷田恵司氏の司会のもと、堀紳介氏による「ジョージ・エリオットはどのように世界を描くのか：初期三作品においてエリオットが用いる共感のサインとイメージの言語」と題した発表が行われた。堀氏は、初期三作品のうち *The Scenes of Clerical Life* は自然描写が少なく、一方 *Adam Bede* と *The Mill on the Floss* は自然描写が多いこと、また前者では登場人物の状況が物体を使って示されるのに対して、後者では自然が登場人物にサインを出す役目を担っていることを述べ、特に *Adam Bede* のヘティはこのサインを読み取れていないと指摘した。次に池園宏氏の司会のもと、奥村真紀氏による「絆と共感： *The Mill on the Floss* における語りの問題」と題した発表が行われた。奥村氏は本作の場合、歴史や時間という河の流れが Maggie の人生だけでなく、次第に人類全体の歴史へと拡張していく点を考察し、全知ではない一人称の語り手が伴走者として読者を巻き込む点を指摘した。どちらの発表も、エリオットが作品内に散りばめた細かな描写を丹念に拾い、それを大きなテーマにまとめていく点で共通しており、精読がいかに重要であるかを改めて学ぶ機会となった。

昼食休憩後、堀紳介氏の司会により2021年度総会が開かれた。総会では、最初に2022年度から廣野由美子氏が新会長に、永井容子氏が副会長に選出された旨、報告があった。続いて、2019-20年度活動報告、2020年度決算報告および2022年度予算案提示、『ニューズレター』第25号編集報告、ホームページ担当委員からの報告、『ジョージ・エリオット研究』22号、23号の編集と投稿規定の改定についての報告、2022年度全国大会予告（2022年12月12日（土）、日本大学）、『フロス河の水車場』英語教科書出版事業、19世紀イギリス文学合同研究会への参加問題について報告があった。

続いてシンポジウム「Jane Austen と George Eliot 『深遠なる重要性を帯びた影響』——その探究の魅惑」に移った。今回のシンポジウムは日本オースティン協会との共催であり、司会講師の惣谷美智子

氏が述べる通り、19世紀を代表する2作家の魅力に迫るシンポジウムであった。冒頭、惣谷氏は、*The Great Tradition* (1948) で F. R. Leavis はエリオットに対するオースティンの影響を「示唆するに留めた」と述べ、その影響関係や影響力の度合いを見出す難しさをうかがわせた。しかしながら、本シンポジウムではどの講師もエリオットに対するオースティンの影響を十分に証明してみせた。川津雅江氏はウルストンクラフトを軸にして、オースティンとエリオット両者の「女性の自立」に対する見解を示し、土井良子氏は両者がスコットを意識しながら作家活動に従事した証を読み取った。永井容子氏は両者が匿名や偽名を使うことで戦略的に自身の作品と距離を取っていた姿を指摘し、新野緑氏は *Emma* と *Middlemarch* のヒロインが判断の見誤りをきっかけに人生を翻弄される描写を考察対象とした。オースティンとエリオットそれぞれの作品を研究対象にしなが、どのパネリストも「作家ジョージ・エリオット」以外の部分、例えば手紙や日記からオースティンの影響関係のヒントを探し、また両者がともに意識した別の作家をも議論の対象とするなど、研究の広さと深さを示すものであったと言える。シンポジウムの最後に惣谷氏が、それぞれ居住地域が異なるパネリストであったが Zoom を介して十分な議論が行えたと述べ、そのことを「知的刺激の交換会」であったと表現した点が印象深かった。偉大な作家の影響関係を議論するには大変な知的準備が必要となるが、今回のシンポジウムを共催としたことで、一人で研究した場合には得ることのできない刺激と情報を得ることができた。

プログラムの終盤には、久守和子氏の司会のもと、廣野由美子氏の「ジョージ・エリオットはジェイン・オースティンから何を受け継いだのか？—『ミドルマーチ』における〈分別〉と〈多感〉」と題する特別講演が行われた。廣野氏はドロシアの恋愛遍歴について、カソーボンとの結婚を「多感による過ち」、ラディスローとの結婚を「多感と分別の闘い」、クライマックスを「分別の勝利と多感への傾斜」と分類し、分別と多感のバランスについて明らかにした。特に、エリオットが、分別を代表するメアリー・ガスと多感を代表するドロシアを作品内で対置させることも対面させることもせず、むしろ多感ゆえに大きな理想を抱き、過ちを犯しながらも試練を分別で乗り越え、その後も分別と多感との間で揺れ動くドロシアの姿を描き切ったと指摘した点は興味深かった。この分析においてもやはりオースティンの影響は明らかであり、やはりエリオットの作品を存分に味わうには、オースティンの存在を無視することはできないと思に至った。

講演後は大嶋浩氏の閉会の辞をもって、第24回ジョージ・エリオット協会全国大会は幕を閉じた。2022年度の全国大会では、会員の皆さまと直接「知的刺激の交換会」ができることを切に願っている。

日本ジョージ・エリオット協会 第24回全国大会シンポジウム（日本オースティン協会共催）

Jane Austen と George Eliot

「深遠なる重要性を帯びた影響」——その探究の魅惑

惣谷美智子

F. R. Leavis は *The Great Tradition* においてエリオットに対するオースティンの影響を示唆するに留めたが、本シンポジウムでは、エリオット、オースティン両協会共催ということもあり、各発表者がそれぞれ多様な切口で2作家の関係性の謎に取り組んだ。

小説は「人生の実験」である、といったのはエリオットだが、現代にまで生き残ってきた文学には、読者を「研究・批評の実験」へと誘い込むある種のパワーが秘められている。それを実感したのが今回のシンポジウムであった。古典テキストには、それを読む者たちが属する各時代の新しいパラダイムの挑戦にも応えられるだけの柔軟性、懐の広さのようなものがあるが、文学研究にも常に新たな再生の息吹が感じられる。たとえばヒリス・ミラーは『ミドルマーチ』の21世紀の読みとして、従来の deconstruction (脱構築) から、reconstruction (再構築) 的読みへの挑戦をし、“(im)possibility of reading”、つまり読みの可能性のみならず、読みが不可能であることの重要性もまた示唆している。

このように考えてくると、リーヴィスが残してくれた謎は、現代の私たちにとってはむしろ貴重な贈り物のようにもみえてくる。今後も学際的な協会間の研究交流等によって、さらに大胆な「研究・批評の実験」が可能となるように願っている。各発表の要旨は以下の通りである。

女性の教育と生活の資

—Austen と Eliot における Wollstonecraft の遺産

……川津雅江

エリオットが1855年にウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』(1792)を再評価したとき、特に注目したのは、女性の教育と経済的自立の箇所である。これらは、エリオットが支援した同時代の女性運動活動家たちが取り組んだ問題だった。オースティンも女性運動の先駆者の一人に数えられており、ウルストンクラフトの本も知っていたらしい。そこで、本発表では、ウルストンクラフトの遺産の跡を探るために、『エマ』(1815)と『ミドルマーチ』(1871-72)にそれぞれ登場する家庭教師から主婦になった女性に焦点を当て、教育と生活の資に関する二人の小説家の考えを比較した。オースティンは、ウェストン夫人の描写を通して、家庭教師として経済的に自立できるほどの教育を受けた知的な女性こそが、ウルストンクラフトが理想とする母親の教育的役割を十全に果たすことを示した。一方、エリオットは、さらに踏み込んでウルストンクラフトの考えを継承した。エリオットのガス夫人は自活できるだけの教養を持っていることを誇りに思い、共稼ぎで夫とは平等な関係を築きながら、娘のメアリを自活できる女性に育てるといふ、ウルストンクラフトが理想とする既婚女性である。

初期作品からみる Jane Austen と George Eliot

……土井良子

本発表ではまずオースティンとエリオットの少女期の創作に注目し、それぞれの小説家としての特徴を探った。オースティンが十代で書いた“novel”は当時の小説の慣習を反手本としたパロディであり、ヒロインを始めとする登場人物の現実離れした破天荒さが読者の笑いを誘う。しかし年齢が進むにつれて出版を強く意識し世間により受け入れられやすい作品を目指した結果、彼女はウォルター・スコットやジョージ・ヘンリー・ルイスらが一流“lady novelist”の証として激賞した写実的描写へと方向転換したのではないか。一方で、中産階級の女性の社会的・経済的困難を描くという姿勢は初期作品から最後まで一貫している。

一方、エリオットの十代半ばの創作の試みについてはほとんど手がかりがないが、唯一現存する小説の断片には当時愛読していたスコットの歴史小説の影響と共に、後年発揮される人物や情景の優れた描写力の一端が窺える。ただエリオット自身は小説における劇的な描写の創作に当初自信がなかったと振り返っており、本発表では、最初の出版作「エイモス・パートン師の悲運」の前半部執筆の際、オースティンの『自負と偏見』が主人公やプロット造型の一助となった可能性を提示した。

Jane Austen と George Eliot の匿名性と作品を取り巻く「視点」

……永井容子

18世紀後半から19世紀前半にかけて、匿名や偽名で作品を刊行することは決して珍しいことではなく、出版慣習に従うものであった。オースティンのように匿名で小説を発表する、またエリオットのように偽名を用いて小説を発表する行為は、批評家を始めとする読者からの批判をかわし、作品が正当に評価されるための自己防衛であったと同時に、自らの作品と一定の距離を保ち、多角的な視点や多様な解釈を容易にする一つの作家戦略と捉えることができる。二人の女性作家の叙述方針や描き出される世界の広さや奥行きには違いがあるものの、彼女達が共に作家として認識していたものとは、確実性や完結を求めることの難しさであり、「捉えどころのなさ」(elusiveness)を許容する精神であったと言える。ミシェル・フーコーによれば作者名は、その作者が手がける小説のあり方、または小説の存在様態を表すものであるとされる。本発表では、*Emma*(1815)と*Middlemarch*(1871-72)を比較対照し、この「捉えどころのなさ」という特徴こそが、匿名・偽名という性質そのものを表すものであることを明らかにした。

<見誤り>の悲喜劇—*Emma* と *Middlemarch*—

……新野 緑

ジョージ・ヘンリー・ルイスはオースティンを高く評価し、*Jane Eyre*を刊行したばかりのシャーロット・ブロンテに、オースティンの作品を読むよう奨めたという。彼がとりわけ評価した *Mansfield Park* や *Emma* を今読んでいる、とジョージ・エリオットが日記に記したのはその10年後の1857年だ。あたかも処女作“The Sad Fortunes of Amos Barton”を発表し、小説家としてのスタートを切った時期と一致する。それは単なる偶然か。果たしてオースティンはエリオットの創作活動にどんな影響を与えたのか。*Emma*が、自身の頭の良さを過信するヒロインを中心に、登場人物の<見誤り>が生み出す多様なドラマを、皮肉とユーモアを交えてコミカルに描いた物語なら、*Middlemarch*は、知的渴望に駆り立てられ相手の本性を<見誤って>結婚したヒロインが、夫への幻滅と妻としての義務感の狭間で葛藤する様子を心理の奥に分け入って克明に描く。しかし、語りの形もプロット展開も物語の調子(トーン)も異なる二つの作品を仔細に検討すると、登場人物の造形や人間関係、そして何より他者や自己に対する認識の行為が孕む問題性の探究の点で、思いがけない類似が潜んでいる。*Emma*と*Middlemarch*における<見誤り>に焦点をあて、その類似と差異を検討して、エリオットによるオースティン理解の一端を探った。

第 25 回全国大会について

2022 年 12 月 10 日（土）、日本大学法学部（東京都千代田区神田三崎町 2 丁目 3 番 1 号）にて、第 25 回全国大会を開催いたします。当日は、研究発表、総会、シンポジウム、特別講演会、懇親会を予定しております。多数の皆様のご参加をお待ちいたしております。

大会の詳細は 10 月に協会のホームページに掲載し、ご登録いただいているメールアドレスへお送りする大会プログラムでもお知らせいたします。経費節約のため、大会プログラムはホームページまたは添付ファイルよりダウンロードしていただきますようお願いいたします。また、大会のご出欠はメールでご案内しますオンライン出欠フォームをご利用いただきますよう、お願いいたします。

尚、昨年度の総会におきまして、会員の方々（学生会員を除く）にも大会参加費をお 1 人 500 円いただくことが決定されました。協会の運営費確保のため、ご協力の程、お願いいたします。

第 25 回全国大会シンポジウム

題目：響き合う作品世界

— G.エリオットと 20 世紀、21 世紀の作家たち

(V. Woolf, E. Bowen, A. S. Byatt, & A. Soueif)

司会・講師 窪田 憲子（都留文科大学名誉教授）

G.エリオット『ロモラ』と A. S.バイアット『抱擁』に見る歴史認識

講師 木下 未果子（神奈川大学非常勤講師）

G.エリオット『ダニエル・デロンダ』と V.ウルフ『幕間』にみる「個」と「集合体」の関係

講師 伊藤 節（東京家政大学名誉教授）

E.ボウエンの後期作品（『心の死』、『エヴァ・トラウト』）における感情描写

—G.エリオットの後期作品（『ミドルマーチ』、『ダニエル・デロンダ』）との関連において

講師 濱 奈々恵（北九州市立大学准教授）

現代エジプトにおける G.エリオット作品の継承と書き直し

—A.スウェイフの *In the Eye of the Sun* を手掛かりにして

シンポジウム要旨

総体的にイギリスの女性作家は、過去の先達の作家たちを意識する度合いが強い。たとえば、ゴシック小説を批判した J.オースティン、そのオースティンの世界を「美しいけれども、広々とした田園も、新鮮な空気もない場所のよう」と批判した C.ブロンテなどがすぐ思い浮かぶ。批判するにせよ、尊敬するにせよ、イギリスの女性作家たちは、過去の女性作家とのつながりを強く意識して自分の文学を創り上げてきた。それは、V.ウルフが述べるように、「女性だったら、自分たちの母親を通して過去を考え」、文学の伝統を培ってきたからであろう。では、20 世紀、そして 21 世紀の作家たちは、過去の作家、とくに G.エリオットとどのようなつながりを持っているのだろうか。本シンポジウムにおいては、20 世紀の女性作家から、V.ウルフ、E.ボウエン、A. S.バイアットを、21 世紀の作家として、A.スウェイフを取り上げ、これらの作家たちとエリオットの文学世界がどのように響きあうのか考察する。そのような営為を通じて G.エリオットの‘proto-modernist’的な側面を浮かび上がらせることができると考えている。

具体的には、木下氏は、G.エリオットと V.ウルフの最後の長編小説において、デロンダとラ・トローブという他民族の血を引く人物が物語の中心に据えられていることに注目し、一個人の個としての自律と集合体への融合という二側面のバランスの在り様がどのように描かれているかを探る。伊藤氏は、難解で風変わりな作風で知られる心理主義的リアリストのボウエンが、モダニズムおよびポストモダニズムの手法でいかに人の感情を探り描出したかを、この分野の先駆者ともいえるエリオットとの関連で考察する。窪田は、現代とヴィクトリア時代の 2 つの時間軸をもつバイアットの『抱擁』を取り上げ、バイアットのエリオットに寄せる思いや、両作品にみられる歴史認識を考察する。濱氏は、エジプトとイギリスに文化的なルーツを持つ A.スウェイフに注目し、スウェイフがエリオット作品を継承しながらも、いかにポストコロニアルな視点から書き直したのかについて論じる予定である。（窪田憲子）

第 25 回全国大会特別講演のご案内

本年度の特別講演には、原田範行先生（慶應義塾大学教授、日本英文学会前会長）を講師としてお招きします。先生は 18 世紀イギリスを中心とする近現代英文学をご専門とし、これまでに『「ガリヴァー旅行記」徹底注釈』（岩波書店）、『風刺文学の白眉—「ガリバー旅行記」とその時代』（NHK 出版）、『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』（彩流社、共著）などのご著書、およびサミュエル・リチャードソンの『パミラ、あるいは淑徳の報い』（研究社）、『召使心得 他四篇—スウィフト諷刺論集』（平凡社）などの翻訳書、また *Robinson Crusoe in Asia* (Palgrave Macmillan)、*Recent Scholarship on Japan* (Cambridge Scholars Publishing) で論文を発表されました。特別講演のタイトルは「環境文学としてのジョージ・エリオット作品—風景、家屋、社会」です。皆様、奮ってご参加ください。

講演要旨

ジョージ・エリオット作品の魅力の一つは、風景と情景が、自然と人物の心理が、また家屋の細部と社会的動向が、有機的に結びついて圧倒的な迫力を有しているという点にある。細部と全体とのこうした往還とその統合的な姿をかりに環境文学と呼び、そうした環境文学をイギリス小説史において傑出した形で実現した作家としてエリオットを捉えつつ、身体性、情念、倫理性、思想、リアリズム、語りといった彼女の作品の文学的特徴を検討してみようとするのが、本講演の目標である。

第 25 回全国大会研究発表者の募集

発表テーマ： ジョージ・エリオットに関連したもの 発表者数： 1～2 人（予定）
応募資格： 日本ジョージ・エリオット協会会員 応募締切： 7 月 25 日
発表時間： 30 分（発表 25 分、質疑応答 5 分）時間厳守でお願いいたします。
レジュメ： ワープロ A4 版で、約 400 字程度。発表題目には、英文名も添えてください。
※ 原稿には、氏名・住所・所属・電話番号・メールアドレスを明記してください。
宛先： 〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1 徳島文理大学香川校 中島正太研究室内
日本ジョージ・エリオット協会事務局／E-mail: georgeeliot.japan@gmail.com
応募は郵送、またはメールで、お申し込みください。応募者多数の場合は、調整させていただきます。

2023 年度『ジョージ・エリオット研究』第 25 号への投稿論文募集

2023 年 11 月に発行予定の学会誌『ジョージ・エリオット研究』第 25 号の投稿論文の締め切りは 2023 年 4 月 1 日（土）厳守です。奮ってご応募ください。投稿規定およびチェックシートは、協会のホームページ (<https://www.g-eliot.com/ronshu>) からダウンロードすることができますので、必ずご参照ください。論文の他にも書評を募っておりますので、新刊書などの書評をご希望される方は、編集委員長の大嶋浩先生、もしくは事務局まで、お早めにお申し出ください。

会費納入のお願い

会費納入につきまして、お願いいたします。年会費および振込先は、以下の通りです。

一般会員	7,000 円（国内会費 5,000 円と英国本部会費 2,000 円）
英国本部に登録された終身会員	5,000 円（国内会費のみ）
学生会員（大学院生、学部生など）	2,000 円（本部会費を含む）

振込先（郵便振替口座）：00960-0-105579 日本ジョージ・エリオット協会

*手数料はご負担いただいております。

George Eliot Newsletter of Japan 第26号

発行者 日本ジョージ・エリオット協会

代 表 廣野 由美子

編 集 濱 奈々恵

事務局 徳島文理大学香川校 中島正太研究室内

〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1

TEL 087-899-7152 (直通)

E-mail georgeeliot.japan@gmail.com

Homepage <https://www.g-eliot.com/>

振替口座番号 00960-0-105579

発行日 2022年6月1日